

「愛するものについてうまく語れない」

- 『わがスタンダール』を通じて見たスタンダリアン大岡昇平 -

« We always fail to talk about what we love » - On Ôoka Shôhei's Stendhal studies -

ジュリー・ブロック

Julie Brock

造形工学部門

Department of Architecture and Design

(2011年7月26日原稿受理、2012年5月16日採用決定)

『野火』などの作品で知られる小説家の大岡昇平は、同時に優れたスタンダール研究者でもあった。研究者としての大岡の活動は次の三つの時期からなる。戦前から戦中にかけて『パルムの僧院』を主要な対象としていた第一期(1934-1944年)、より俯瞰的なヴィジョンを獲得し、『赤と黒』の劇作化、『スタンダールの生涯』へとつながってゆく戦後の第二期(1948-1973年)、そして『アンリ・ブリュラルの生涯』に注目し、「エゴチスム」、「自伝的物語」の問題へと関心をうつしてゆく第三期(1977-1988年)である。なかでも本研究は、こうした研究活動の最晩年に大岡が若かりし頃の読書体験に立ち戻り、自身の「読むこと」と「書くこと」を結びつけようとしていた点に注目したい。大岡にとってスタンダールは、愛するが故に決して語りきることのできない対象であった。晩年の大岡はそうした二律背反に真摯に向きあう作業を通じて、創作のかたちをとった自伝的物語という豊饒な世界を切り開いてゆくのである。

検索キーワード：大岡昇平 『わがスタンダール』 自伝 フィクション 『赤と黒』 バルト スタンダール研究

Ôoka Shôhei is very well known as a novelist, but he is also a great appreciator of Stendhal. He himself divides his research on Stendhal into three periods: pre-war and war (1934-1944), where he discovered *The Charterhouse of Parma* and dedicated several works to it, post-war (1948-1973), marked by his reading of Aragon and Liprandi, where he wrote the scenario of a play entitled *The Red and the Black*, and finally the period at the end of his life (1977-1988), where his interest, starting with *Life of Henry Brulard*, is in the thematic of the autobiography. In his last article, entitled “We Always Fail to Talk of What We Love”, which he left unfinished, Ôoka himself considers this reading journey which spanned his entire life. Using his studies of Stendhal to fathom out the reasons why this writer fascinates him as a reader, he shares with Stendhal, as a writer, the idea of a world that is reflected in novels as through a mirror.

Key-words :

Ôoka Shôhei, *My Stendhal*, autobiography, fiction, *The Red and the Black*, Barthes, Stendhal Studies

若きスタンダール研究者―戦場まで

大岡昇平 (1909-1988) の名は、その戦争小説『野火』、恋愛小説『武蔵野夫人』『花影』、最近フランス語翻訳された戦記『俘虜記』などの作品が続いて刊行されたことにより、近年フランスでもよく知られることとなったが、彼がスタンダールを専門的に研究していたということはかの地ではほとんど知られていない。そもそも、若き大岡は京都大学でフランス文学を専攻していたのであるが、のちに数度にわたって語るようになるように、スタンダール研究者であった桑原武夫から『パルムの僧院』の美しさを教示されることになる。とはいえ彼が『パルム』を読んだのは京都大学を卒業しておよそ一年が経過した1933年のことであり、本格的にスタンダールに打ち込むのはさらにその一年後の1934年のこと、そして以後、この研究は大岡がこの世を去る1988年までたゆむことなく続けられることになる。

大岡は1932年の時点ですでにアンドレ・ジッドによる『アルマンズ』への序文の翻訳を手がけていたが、先に述べた1934年にはその名の通り「スタンダール」(文末の文献表参照)と題された論文を、さらに1935年には『アンリ・ブリュラルの生涯』についての小論を著す。1936年から37年にかけては、小林正との共同作業により『スタンダール選集』(竹村書房)の編纂。また、この時期になされた一連の翻訳としては、1939年にアランの『スタンダール』、1942年にティボーデの『スタンダール伝』、1944年にバルザックの「スタンダール論」などが挙げられる。続いて大岡は1944年5月に『スタンダール論』を出版し、バルザックによるスタンダール論、スタンダールによるバルザックへの応答となる草稿三通、バルザックの助言により書き直された『パルムの僧院』の数節、そして「ファルネーゼ家の起源」の翻訳を手掛けただけでなく、自ら60ページにわたる解説を加えている。

ところで、折にふれ大岡が書いていることだが、動員が身近に迫っていることを強く予感していた当時の彼にとって、この『スタンダール論』は一種の「遺書」のようなものと考えられていた。実際、出版された本が大岡の手元に届いたのは、1944年12月12日、出征先のフィリピンでのことで、アメリカ軍の上陸の三日前であったという。「私の敗走中の反省にスタンダールに関するものが多いのは、丁度自分の本を読み返したところに、敵が上って来た、ということと関係があるらしい、ということ、いまこれを書きながら思い当たります」(大岡昇平『わがスタンダール』、講談社、1989、p. 215)。大岡はこのときすでに『パルムの僧院』——この小説の主人公ファブリスはナポレオン軍のなかで潰走を経験する——を絶賛していたが、その彼がフィリピンでは日本軍の一員として惨めな潰走をみずから経験することになるのである。

『赤と黒』の脚本について

大岡は、復員後の1948年に『恋愛論』を、1948年から51年にかけて『パルムの僧院』をすでに翻訳していた。ところで、クロード・オータン＝ララによる『赤と黒』の映画化(1954年)が盛況を博したことがきっかけで、東京の芸術座が1966年に同作品の舞台化を決定した。この舞台化に際して、芸術座の統括者であった劇作家の菊田一夫から、『赤と黒』の脚本の執筆を依頼されることになる。

当時大岡は、小林正の翻訳によるルイ・アラゴンの『スタンダールの光』を読んでいただけでなく、クロード・リプランディの研究『スタンダール、「水辺」と「密書」』 *Stendhal, Le « Bord de l'eau » et la « Note secrète »* によって、『赤と黒』に描かれる「密書」のエピソードが、1818年の実際の事件を題材にしていることを知っていた。この時期に大岡は、『赤と黒』という小説の政治的側面に目を向け、また、こ

の小説に同時代性を付与しようとする作家の意志を実感していた。

このような政治性を盛り込むべく、大岡は自らの脚本『赤と黒』に「密書」についての会話を書き加え

た。しかしこの箇所は、公演開始二日前になって、演出を務めた菊田一夫から削除を求められることとなる。演劇的でない、との理由であった。この問題をめぐって大岡と菊田は対立したが、この箇所が削除されるなら自身の名前は出さない、大岡がそう強く迫ることで公演は実現された。

当時いくつかの新聞紙面に劇評が掲載され、それらは大方、この脚本を翻訳の写しに過ぎないと批判していた。それに対し大岡は、自分の脚本における「密書」をめぐる議論はそもそも原典に見られない独自の解釈であり、観客に『赤と黒』の政治性を明確に理解させるためになされたと答えている。この論争は、当時グルノーブル¹⁾にいたスタンダール研究者デル・リットの耳にまで届いている。彼は「日本のスタンダール——『赤と黒』、東京にて上演する」(Victor Del Litto, « Stendhal au Japon. On a joué à Tôkyô "Le Rouge et le noir" », *Cahier de L'Alpe*, n° 24, décembre 1966, p. 225-226) という文章を出版した。一方で大岡自身は、デル・リット氏が自分に好意的な立場にあり、氏が「W. S. クラークが明治八年に札幌農学校に残した有名な « Boys, be ambitious » に従って、近代日本は構造的に成り上がり社会であり、従って『赤と黒』が受け入れられる」(大岡、前掲書、p. 348) と結論づけていることを述べている。

大岡は、デル・リットの意見に完全に同意していたわけではない。経済面のみを見るならばクラーク、さらには彼に着想を得たデル・リットの見解は正しいが、ただ「野心」なるものは政治経済的な面に限られるものではない。続く言葉にも見られるように、大岡はむしろ、「国会議員は裁判で有罪の判決を受けなくても、当選のみそぎによって実質的に無罪を獲ち取ることができる」ような「現代の様相」(同書、p. 349) に広く目を向けており、1966年当時の日本に蔓延していたこの種のきな臭さを告発するために、『赤と黒』の脚本化に際して「密書」というテーマを展開しようとしたと考えられる。

日本における『赤と黒』の成功は、デル・リットのような素朴な理由にもとづくのではない。むしろこの小説が現代にあってなお有効な政治批判の書たりうることのほうが重要であろう。当時の大岡が細心の注意を払おうとしていたのもまさにそうした部分であった。

大岡は1972年に古谷健三と共訳で『赤と黒』を出版している。

『親愛なるスタンダール *Cher Stendhal*』——「自伝的物語」について

1973年、大岡はそれまでに書いたスタンダールについてのほとんどの論文と『赤と黒』の舞台脚本を収録した本『わがスタンダール』を立風書房から出版した。本のカバーには、フランス語で「*Cher Stendhal* (親愛なるスタンダール)」と記されている。同書はのちにも二つの出版社から出版されることになるが、*Cher Stendhal* と記されているのはこの立風書房版だけである。

このころ大岡はすでに小説家としての代表作の多くを世に問うていたが、1970年代初頭から中央公論社が大岡の「全集」の編纂に着手し、立風書房版の『わがスタンダール』に収録された論文もここに再録されることとなった。

1984年に岩波書店から出版された二つ目の「全集」の第17巻は、再び『わがスタンダール』と題されており、この巻の「作者の言葉」には次のように書かれている。

これまでに書いたスタンダールに関する論文を中心に、私の外国文学、音楽、美術に関する論文を集めました。『パルムの僧院』に捉まってから、五十年間にこれだけでははずかしいのですが、今年(一九八三年)が生誕二百年で、かなり新しい研究も出ましたので、来年は少しまとまったものを書きたい、と思っています。

私のスタンダールについて書いたものが、大体三つの時期に分かれているのに気がつきます。最初は一九三三年に『パルムの僧院』に捉まってから四四年にバルザックの『スタンダール論』の解説を書いて出征するま

です。主として政治的ですが、『ハイドン伝』を翻訳したから、「ハイドンについて」の中には、戦時下の呻きの表出があります。

第二は復員してから、再び『パルムの僧院』について「冒険小説」と規定したのは、それだけゆとりができたのだ、と思います。スタンダールの生地、グルノーブルを訪れたり、情報が増加します。『赤と黒』を劇化したりしましたが、小説の方が忙しくなり、間を縫っての仕事で、飛び飛びになります。それらを1973年『わがスタンダール *Cher Stendhal*』（立風書房）にまとめるまで……。〈大岡昇平「作者の言葉」、『大岡昇平集』、第17巻、岩波書店、1984年、p. 549-550〉

それに続く大岡自身の分類によるところの第三期は、日本でのスタンダール受容についての研究に多くを割いた期間であった。大岡は例として、1982年の「大正のスタンダール」を挙げているが、それ以前にも「エゴチスムとは」（1977）、『パルムの僧院』と南国太平記（1980）、「エゴイストたち—スタンダールの場合」（1981）が数えられようし、そもそも立風書房版『わがスタンダール』（1973）の「あとがき」はまさに日本におけるスタンダール受容を論じるものであった。

こうした大岡自身のスタンダール研究の推移を見るにあたり、特に注目すべきは、「エゴチスム」に関する問題が彼の研究の第三期を特徴づけるものとなっていることにある。大岡の1986年の論文「日本のスタンダール」では、『アンリ・ブリュラルの生涯』の翻訳出版とともに、「自伝」というジャンルが日本の文学界においても問題化されようとし始めていた、ということが述べられている。当の小説の最初の翻訳は1940年になされているが、さして注目されなかった（大岡『わがスタンダール』、p.343）。同書が識者の関心を惹き付けることとなったのは人文書院の『スタンダール全集』に収録刊行された1968年のことである。参考までに、同年には『ヴァレリー全集』が注目されている。

ジャン＝ジャック・オリガスの論文「現代小説の方向性——1955-1987年」²⁾には、1970年代初頭の日本では「長い間時代遅れで周辺に追いやられていたジャンルである自伝的物語」への回帰が起ころうとしていた、ということが述べられている。これに対して大岡は、ヴァレリーを経て日本へと紹介されたこの『アンリ・ブリュラルの生涯』という作品こそが、自伝というジャンルに関わる問題を喚起せしめたのだ、とする。日本人は私小説を通じて一人称の物語形式に慣れてしたが、彼らは、『アンリ・ブリュラルの生涯』に自伝的フィクションを発見した。そこでは、新たな見通しが提示され、それによって、私小説において語り手であった日常の「私」ではなく、物語に入り込み、語り手の役割を担う想像上の「私」が登場するのである。それはすなわち、現実とは異なる「想像の私」が演技手となるような「自伝的フィクション」の世界であり、演技手が物語のなかを自ら駆け巡り、それでいながら「私小説」における語り手の位置を占めもするような世界である。『アンリ・ブリュラルの生涯』が、日本の作家たちにこうした文学的実験へ目を開かせ、大岡の『レイテ戦記』はまさにその実例となった³⁾。この自伝的フィクションは、日本的な形式である私小説の型を用いながら、日常の「私」ではなく「想像上の私」を登場させることによって、現代的な小説のひとつの可能性を示し、私小説というジャンルを一新したのである。

1970年代の日本において自伝というジャンルへの関心が再び盛り上がったことは、確かに日本研究者が見出したことである。しかし、この現象と日本におけるスタンダール受容への注目⁴⁾との関係を見いだすことができるのは、やはり比較文学研究の仕事である。つまり、比較文学研究は日本研究にさらなる貢献ができるのである。

愛するものについてうまく語れない

それ以後は、「大正のスタンダール」など、日本におけるスタンダールの受容史に関するものが多く、同時に私自身におけるスタンダールの影響の反省を伴うものです。それは最初から私にあったもので、いま用意している論文も、その線に沿ったものになるだろう、と思います。(大岡「作者の言葉」、p.550)。

大岡はこの引用に見られる「いま用意している論文」がどれにあたるかを明示していない。しかし、この文章が書かれた時期以降には五つの論文しか書かれていない。すなわち、『パルムの僧院』に感動(1984年)、「日本のスタンダール」(1986年)、「スタンダールの『ハムレット』」(同)、「無頼派の系譜——「日本のスタンダール」」(1987年)、「愛するものについてうまく語れない——スタンダールと私(1)」(1988年)の五つである。

「愛するものについてうまく語れない」というのは、ロラン・バルトが1980年3月にミラノのスタンダール国際学会で行う予定だった講演の表題である⁵⁾。このテキストは、1980年2月15日にバルトが急逝することにより、未完のまま残された。大岡昇平はこの表題を自身最後の論文に冠することを考えたが、大岡も1988年12月25日にこの世を去り、彼の論文も未完のままに残されたのである。

バルトのテキストには次のように書かれてある。「逆説に聞こえるかもしれませんが、スタンダールはイタリアのことをうまく語る術を知りません。いや、イタリアを語り、歌いますが、描写はしないのです」(ロラン・バルト「人はつねに愛するものについて語りそこなう」、『テキストの出口』、沢崎浩平訳、みすず書房、1987年、p.147を参照のこと、強調は原文ママ)。大岡はバルトの論文の題を借りることで、まさに「愛するものについてうまく語れない」からこそ、自身もまたスタンダールの作品についてうまく書くことができなかつたことを示唆しようとしているのだろう。

バルトはさらに「[イタリアに対する]愛をスタンダールは宣言しますが、それを売り物にすることはできません。あるいは、今日いわれるように(車の運転についての隠喩ですが)、取引する(つまりスピードの加減を調節してカーブをうまく曲がる)ことができません。このことを彼はよく知っています。それに苦しみ、不平を漏らします。絶えず、《自分の考えを表現》できないことを思い知らされます。自分の情熱がミラノとパリの間に設ける差異を説明するのは《至難の業》であることを確認します」と書いている(同書、p.147)。スタンダールが美しいイタリアに対して感じた愛にも似た情熱を十全に表現し得なかつたように、大岡はスタンダールの作品の美しさについて本を書くことができなかつた。

彼の嘆きは真摯なものであつただろう。

私は戦後、戦争と戦場について[中略]もっとも多く書く作家ということになり今日に到っている。六十歳になったら、予定の主題を書きつくし、まとまった「スタンダールの生涯と作品」に取りかかろうと思っていた。ところがテーマが次々に割り込んで来るので、遂に六十歳が八十歳になって、書きはじめることになってしまった。

そのうちに「生涯と作品」について新鋭の研究家のものが出た。老人としては「明治」「大正」「昭和」のスタンダール像の変遷について、折に触れ本誌[雑誌『海燕』のこと]に書いた。(大岡昇平「愛するものについてうまく語れない——スタンダールと私(1)——」、『大岡昇平全集』、第二十巻、筑摩書房、1995年、p.867)。

ところで大岡が『パルムの僧院』を実際に読むこととなったのは先述の通り1933年のことであるが、そのきっかけとなったのは谷崎潤一郎の1927年の「饒舌録」である。「私は京都大学に入って、桑原さんか

ら『パルムの僧院』の面白さを教わり、卒業後の昭和8年2月に読んで、ファブリス・デル・ドンゴの無垢^{むく}と行動性に魅了されて今日に到っているが、それは谷崎の「饒舌録」で準備されていたといえる。」(『わがスタンダール』、p.325)。谷崎はこの論文で、「当時の文学の神様」であった志賀直哉と芥川龍之介とは異なり、大衆小説を擁護し、『カストロの尼』と『パルムの僧院』の名を挙げたうえで、筋のある小説の方が面白いとした。大岡は谷崎の次の言葉を引用している。

小説の技巧上、嘘のことをほんたうらしく書くには――或いはほんたうのことをほんたうらしく書くのにも、――出来るだけ簡^(ママ)浄な、枯淡な筆を用ゐるに限る。此れはスタンダールから得る痛切な教訓だ。(同書、p.867より引用)

これに続く箇所で大岡は次のように述べている。

齢八十に達して、納得した、とこれを書き始めるいま断言することはできないけれど、この感動と愛着が、私個人の内的事情と密着したものであることはわかっている。そこで「スタンダールと私」という図々しい題で書き出したわけだが、一九三三年(昭和八年)で二十四であった一人の文学青年の告白が、文学一般の理解に、資料として役立てば、私は満足である。(同書、p.868)

ここからわかるように、その人生において、また文学者として、絶頂を迎えようというときにありつつも、大岡は文学一般についての問いを手放そうとはしなかった。だがもっとも重要なのは、ここにきてようやく、作家の視点と読者の視点が結びついていることである。長く豊かな経歴を持つこの作家が、スタンダールを読む情熱に満ちた若者と自身の姿をかさねてみせる。彼が最初に『パルムの僧院』を読んだ時の感動は、60年ものあいだ絶えず書き続けられた。「感動」なるものが文学の創作のみならず読書の根本を構成するという同様の考えは、とくに1984年の論文「『パルムの僧院』に感動」においてすでに表現されていた。

スタンダールへの「感動」

大岡は、スタンダールの読書から得た最も強い感動を次のようなかたちで表現している。

ワーテルローの戦場にて、若い騎兵ファブリスは本当の戦争をする喜びに夢中になっている。敵兵を見つけて、彼はためらうことなく引き金を引く。狩猟者である彼は、「獲物」のそばへ喜び勇んで駆けつける。死にかかっている「獲物」に手を触れようとしたその時、二人のプロシア騎兵が剣で斬りつけようと襲いかかる。ファブリスは銃を捨て、森へと逃げ込む……

大岡は、この場面が彼の記憶に深く刻み込まれていると語る。彼はこの場面を「泣き、笑いながら」(同書、p.870) 読んだという。自分でもうまく理解できないというこの衝撃は、哀しみだったのだろうか、喜びだったのだろうか。考えてみれば、狩猟者が獲物へと立場を変えるというこの技法は喜劇によく見られる展開であるが、しかしここでは場面が、大岡がやがてみずから経験することになるような戦争、戦場の悲劇的な状況へと結びつけられている。

ここで思い出しておくべきは、大岡が1944年に『スタンダール論』を出版する際に、動員が近いこと、そして死が近いことを感じ、この本を自身の遺書とみなしていたことである。実際、いくつかの戦記によ

ってよく知られているように、大岡は現実の戦場でアメリカ兵と対峙し、銃口を向けるものの結局引き金を引くことができない、という体験をなすこととなる。

大岡はスタンダールの作品に点在している予言、予感、予知といったものに対しても、つねに細心の注意を払おうとしていた。あの『パルムの僧院』の場面から大岡が得たものとは、彼自身が言う「個人の内的事情」と結びついた印象であり、従って大岡の心の奥にそもそも秘められていた戦争の予感を示唆するものであろう。大岡は、そうした予感から目覚めた不安を「涙まじりの笑い」というかたちで表出させたのかもしれない。このような読書体験によって得られた束の間の印象が、ときに葛藤を生じさせながら作家の人格を形成する素材となり、やがて小説の人物創造に供されるということは十分にありうることである。

ともあれ、「スタンダールと私」という題は、私的なつながりに根ざすものである。最晩年にいたるまで、その生の営み、そして作品の創造を通じて、大岡昇平がスタンダールとのあいだに結んできた関係は、少なくとも彼の作家としての像を知る鍵となっている。「愛するものについてうまく語れない」。バルトより借りたこの言葉が、自身の論文集に『わがスタンダール』、最後の論文に「スタンダールと私」という表題をつけた大岡の感情を解き明かしてくれる。

スタンダールに借りた鏡に映るもの

大岡は明らかに、しばしば記憶に頼って引用しながら、速筆でもって論文を書いている。まとめようとする欲望から、文章の流れの速さが生まれている。彼はこの偉大な先人に対する自分の愛「すべて」、敬意「すべて」を表現したかったのであろう。同時に、彼は絶えず、スタンダールに関する入手可能なあらゆる研究を読むことで膨大な知識を蓄えていた。そうした研究の蓄積に自身の作家としての実体験を重ねることによって、大岡はスタンダールの作品がもつ表現や思想の意義を見抜くことが出来たのである。大岡は人生を通じて最後まで研究を続けたのである。それは、ひとつの極みにまで到ることを望んだ大岡が、情熱をもって終生おこなった「研究」であり、ひとつの「作品」といってもよかろう。それはいち読者としての「私」の物語でもある。

だが、スタンダールに対して大岡昇平が抱いていた尽きぬ情熱の源泉は、この「物語」において解決不能な問題であり続けた。スタンダールへと向けられた思考、その愛を語ろうとするすべての試みは、真の愛であり、それゆえにこそ叶わぬものと定められている。決して語り尽くせない、語られることのない思いこそが、スタンダールと大岡昇平の読者である私たちを惹き付ける。スタンダールを追いつづけることによって大岡はおのれの系譜を遡り、そしてまた次の世代に残すべきものを探し求めた。彼が育み、また彼を育んできたのは、こうした世代を隔てた人の結びつき、触れあいのあり方についての探求であった。しかしこうした探求は、そもそもの前提から不可能なものであり、決して解くことの出来ない問題であった。「愛するもの」は学問の主題とはなり得ないのである。

あるいは、スタンダールを読むことによって得られた情熱を解き明かすことが大岡の願いであったのかもしれない。すなわち、文学が読み手にもたらす効果こそが彼の探求の対象であったのであろう。こうした文学体験が書き手と読み手の出会いを可能にするならば、大岡のスタンダール研究が、緻密な読みに裏打ちされつつも、同時に「私」の名においてなされる創作的な身振り、ひとつの自伝的物語のかたちをとっていたとしても不思議ではない。

そうした意味で大岡のスタンダール研究は文学的創作としての側面を有している。おのれの読書についての「私語り」を實踐するなかで、スタンダールの読者であり、また文学者でもあった大岡の姿が浮き彫りにされていく。スタンダールのような作家になること。この情熱的な願いこそがまさに大岡昇平のスタ

ンダール研究の対象であった。大岡は、作家としても研究者としても、つねにスタンダールから借りた「鏡」に自身の歩みを写し取っていた。その鏡に『パルムの僧院』が映し出されるとき、世界の輝きを感じ、今生きている瞬間に魅惑された若者の姿がある。

翻訳：福田裕大

本文中で言及した文献表

I- 大岡昇平の文献（年代順）

文学作品

- 1950 - 『武蔵野夫人』、大日本雄弁会講談社（連載：『群像』1950年1月号～9月号）
1952 - 大岡昇平『野火』、創元社（連載：『文体』第三号（1948年12月）、同誌四号（1949年7月）、『展望』1951年1月号～8月号）
1952 - 大岡昇平『（合本） 俘虜記』創元社
1961 - 『花影』、中央公論社（連載：『中央公論』1958年8月号～1959年8月号まで10回連載）
1971 - 『レイテ戦記』、中央公論社
1973-75 - 『大岡昇平全集』中央公論社
1984 - 『大岡昇平集』、岩波書店
1995 - 『大岡昇平全集』筑摩書房

翻訳書

- 1932 - アンドレ・ジイド「スタンダール論—『アルマンズ』序文—」、大岡昇平訳、雑誌『小説』第三号
1938-39 - スタンダール『ハイドン伝』、大岡昇平訳、『鞆』第1号～3号
1939 - アラン『スタンダール』、大岡昇平訳、創元社
1942 - ティボーデ『スタンダール伝』、大岡昇平訳、青木書店
1944 - バルザック『スタンダール論』、大岡昇平訳、小学館、5月
1948 - スタンダール『恋愛論』上下、大岡昇平訳、創元社、4月
1951 - スタンダール『パルムの僧院』上下、大岡昇平訳、新潮社、2月
1972 - スタンダール『赤と黒』、大岡昇平・古谷健三訳、講談社

スタンダール評論

- 1934 - 「スタンダール」、雑誌『ヴァリエテ』第7号、野田書房、10月
1935 - 「アンリ・ブリュアラルの生涯」、雑誌『文芸通信』第8号、文芸春秋社、8月
1936-37 - スタンダール『スタンダール選集』、大岡昇平・小林正編、竹村書房
1941 - 「スタンダール ハイドンについて」、雑誌『文学界』第8巻第8号、文芸春秋社、8月
1944 - 「バルザック『スタンダール論』解説」、雑誌『スタンダール論』（バルザックおよびスタンダール著、大岡昇平訳）巻末の「解説」、小学館、5月
1948 - 「パルムの僧院について 冒険小説論」、雑誌『文学界』第2巻第5号、文学界社、5月
1966 - 「劇化についてのノート」、『大岡昇平『戯曲・赤と黒』巻末の「あとがき』、講談社、11月
1973 - 『わがスタンダール』あとがき』、『わがスタンダール』巻末の「あとがき」、立風書房、7月
1977 - 「エゴチスムとは」、雑誌『群像』7月特大号、講談社、7月
1978 - 「読む」、雑誌『不死鳥』第47号、南雲堂、11月
1980 - 『『パルムの僧院』と南国太平記』、雑誌『桑原武夫集』第7巻月報、岩波書店、10月
1981 - 「エゴイストたち スタンダールの場合」、雑誌『群像』10月特別号、講談社、10月
1982 - 「大正のスタンダール」、雑誌『文学界』新年特別号、文芸春秋社、1月
1984 - 『『パルムの僧院』に感動』、『朝日新聞（夕刊）』第35237号、朝日新聞社、1984年2月7日
1986 - 「日本のスタンダール 『スタンダール研究』刊行に寄せて」、雑誌『海燕』第5巻第7号、7月
1986 - 「スタンダールの『ハムレット』」、雑誌『早稲田文学』、9月

- 1987 - 「無頼派の系譜―「日本のスタンダール」」、雑誌『海燕』第6巻第1号、福武書店、1月
 1989 - 「愛するものについてうまく語れない―スタンダールと私1」、雑誌『海燕』第8巻第1号、福武書店、1月
 1989 - 『わがスタンダール』、講談社

II - 大岡昇平が言及している文献

日本語文献

- 桑原武夫、鈴木昭一郎編『スタンダール研究』、白水社、1986.
- 中川久定『自伝の文学 ルソーとスタンダール』、岩波新書、1979.
- 直木三十五「南国太平記」、「大阪毎日新聞」に1929年～1932年連載.
- 西川長夫『スタンダールの遺書』、白水社、1981.
- 西川長夫『ミラノの人 スタンダール』、小学館、1981.
- 西川長夫「自伝と小説の間―『アンリ・ブリュラーの生涯』におけるJ.=J. ルソーの問題をめぐって」、『スタンダール研究』、白水社、1986. 所収.
- 谷崎潤一郎「饒舌録」、雑誌『改造』、1927年2-12月。『谷崎潤一郎全集』、中央公論社、1968.

外国語文献

- Aragon (Louis), *La Lumière de Stendhal*, Denoël, 1954; 『スタンダールの光』、関義、小林正訳、青木書店、1956.
- Barthes (Roland), *On échoue toujours à parler de ce qu'on aime, Tel Quel*, n°85, automne 1980, rééd. In *Le Bruissement de la langue*, Ed. Seuil, 1984; 「人はつねに愛するものについて語りそこなう」、沢崎浩平訳、『テクストの出口』みすず書房、1987年所収.
- Del Litto (Victor), *Stendhal au Japon. On a joué à Tôkyô "Le Rouge et le noir"*, *Cahier de L'Alpe* n°24, décembre 1966.
- Liprandi (Claude), *Stendhal, le "Bord de l'eau" et "La note secrète"*, Ed. Aubanel père, 1949.
- Lukács (Georg), *Balzac et le réalisme français*, Ed. Maspéro, 1967.
- ポール・ヴァレリー『ヴァレリー全集』全12巻、落合太郎編、筑摩書房、（「スタンダール」は第八巻所収。）1971.

自伝に関する文献

- 1940 - スタンダール『アンリ・ブリュラーの生涯』、阿部敬二訳、富山房.
- 1968-73 - スタンダール『スタンダール全集』、桑原武夫・生島遼一編、人文書院.
- 1971 - 野間宏『青年の環』河出書房.
- 1976 - 埴谷雄高『死霊』、講談社.
- 1977 - 島尾敏雄『死の刺』、新潮社.

III - その他の参考文献

- De Vos (Patrick), dir., *Littérature japonaise contemporaine*, Ed. Philippe Picquier, 1989.
- Sabouret (Jean-François), dir., *L'Etat du Japon*, Paris, La Découverte, 1988.

*付記

大岡の死から一年が経過した1989年に、講談社は「わがスタンダール」という表題を再度用いて大岡のスタンダール論文集を出版した。この本には、立風書房に収められていたほとんどの論文とその後に書かれた論文が収録されている。

1995年には、筑摩書房から三つ目にあたる『大岡昇平全集』が刊行された。ここには、上で言及した最後の論文も収められている。当然ながら、筑摩書房版全集がもっとも網羅的である。この版は、大岡自身の手による修正に基づいている。しかし、編者が注で述べているように、大岡が修正しなかったいくらかの誤りは「歴史的事実」のために残されたままになっている(「凡例」14項『大岡昇平全集』第二十巻、筑摩書房、1995)。

どのような誤りがあるか例を示しておく、と、「日本のスタンダール」では、まず、「全集」を「選集」と書く誤りが散見される。あるいは宇高伸一の代わりに宇野伸一と書いたり、「時代思潮」の代わりに「時代批評」と書くなどである。「ラルプ」誌に関しては、24号の代わりに12号と記している。また、章と章で矛盾していることもあり、335ページでは『ナナ』の翻訳が「二百数版」だったとしながら、246ページでは「百二十版」だったと書いている。

¹⁾ スタンダール生誕の地。

²⁾ Jean-Jacques Origas, « Orientations du roman contemporain, 1955-1987 », in Patrick de Vos, dir., *Littérature japonaise contemporaine*, p. 62-70. 次の文献にも再録されている: *L'état du Japon*, p. 214-215.

³⁾ J.-J. Origas は、大岡昇平『レイテ戦記』(1971)、野間宏『青年の環』(1971)、埴谷雄高『死霊』(1976)、島尾敏雄『死の刺』(1960、完全版は1977)に言及している。

⁴⁾ 大岡昇平は次の二つの自伝に関する研究に言及しているが、これらは共に比較文学的研究である。中川久定『自伝の文学 ルソーとスタンダール』、岩波新書、1979。西川長夫「自伝と小説の間—『アンリ・ブリュラーの生涯』におけるJ.=J. ルソーの問題をめぐる」、『スタンダール研究』、白水社、1986。所収。

⁵⁾ ロラン・バルトは、1980年3月19-21日にミラノで開催されたスタンダール国際コロックで講演する予定であった。この講演用のテキストはすでに存在していたが、バルトが亡くなったとき、タイプライターには、推敲中の清書原稿が(挿まれて)残されていた。それぞれは同年秋の「*Tel Quel*」誌に掲載された(三好郁朗訳、『みすず』1981年5月号)。